

至元訳語の q と γ について

吉池孝一

—

元代の「パスパ文字モンゴル語文献」や明初の『元朝秘史』漢字音訳モンゴル語など主要な中期モンゴル語資料では伝統的なモンゴル文語の q と γ が区別されない。これを標記上の問題とみるか実際の音の反映とみるか異なる立場がありうる。

服部四郎 1939 はかつていった。「この両者[モンゴル文語の q と γ に相当する音：吉池補]が 13～14 世紀において別の音素であったことは、諸方言の比較によっても疑いない。」(注 1)。中期モンゴル語文献でモンゴル文語の q と γ に相当する音を区別しないのは、標記上の問題ということになる。

清格爾泰 1983 はいう。「蒙古秘史(元朝秘史)とパスパ文字文献は実際の発音を比較的厳密に記録した貴重な資料である。これらの文献がモンゴル文語の q と γ を一つの音として表記するのは、当時両音が一つの音であったためである。少なくとも記録された当時の方言では一つの音であったことを示している。」(注 2)。中期モンゴル語文献で q と γ を区別しないのは、標記上の問題ではなく、音として区別がなかったということになる。

たしかに中期モンゴル語の主要文献である元代「パスパ文字モンゴル語文献」と明初『元朝秘史』の漢字音訳モンゴル語はモンゴル文語(以下、文語とする)の q と γ に相当する音を区別しない。しかしながら、主要文献の一つに数えることのできる元代『至元訳語』の漢字音訳モンゴル語は両者を区別しているようにみえる(注 3)。

長田夏樹 1953 (注 4) は『至元訳語』の漢字音訳モンゴル語語彙に文語形を付し両者を比較することによって漢字音訳の特徴を論じた。いまそれを基礎資料として文語の語頭の q- と γ- に対応する漢字音訳モンゴル語語彙を列举すると次のようである。なお音訳漢字および文語のローマ字転写は長田氏による。F.D.Lessing et al.1995 (注 5) の文語形と長田夏樹 1953 とが異なる場合 () により Lessing 氏の語形を示した。

語頭の q-

- | | | |
|----------|-----|-------------------------|
| 10. 「雨」 | 忽刺 | qura |
| 25. 「井」 | 忽都 | quduγ |
| 35. 「皇帝」 | 罕 | qan~qayan |
| 39. 「娘子」 | 下敦 | qatun |
| 45. 「甲匠」 | 霍亞直 | qoyayçi (Lessing:quyay) |

81. 「丈人」 合敦阿赤可 qadum äčigä (長田氏注：可は哥か)
84. 「小舅」 合敦斗 qadum dägüü
104. 「黃馬」 黃兀兒 qongyur
106. 「黒馬」 合刺 qara [mori]
129. 「鞦」 忽獨六花 qudurya
130. 「轡頭」 匣荅兒 qaǰayar (長田氏注：<qadayar とする)
139. 「甲」 忽耶 quyay
141. 「傍牌」 匣刺罕 qalqa
149. 「{是+己}」 合兒不合 qalbaya
170. 「鎌」 下禿和兒 qatuγur (Lessing: qaduγur)
179. 「門子」 匣刺瞎 qayalya
195. 「黒豆」 匣刺不奴叉 qara burčay
215. 「鼻」 下八兒 qamar (Lessing: qamar と qabar)
224. 「肋支」 合不兒合 qabirya
290. 「鈴兒」 黃說兒 qongqa (長田氏注：説は豁か) (Lessing: qongqu)
320. 「鷹」 喝里柴合 qarčayai (Lessing: qarčayai と qarčaya)
331. 「鵝」 昏 qun
342. 「燕子」 遏里葉車 qariyačai
354. 「羊」 忽你 qonin
355. 「羔兒」 忽魯罕 qurayan (Lessing: qurayan と quryan)
360. 「山猪」 匣邦 qaban (Lessing: qaban と qabang)
377. 「蘆子草」 忽刺速 qulusun
394. 「樺樹」 忽速木敦 qusu
395. 「榆樹」 害列孫 qayilasun
411. 「二」 活腰兒 qoyar
420. 「二十」 忽魯 qorin
433. 「春」 合不兒 qabur
448. 「二月」 胡打里玉官眞 qudal (偽の) öbügäljin (戴勝)
455. 「九月」 忽察荅里必 quča (羝羊)
474. 「一宿」 你干豁納 nigän qonuy
487. 「後」 懷刺 qoyina
491. 「新舊」 昔匿號眞 sinä qaučïn (Lessing: sinä qayučïn)
516. 「買賣人」 或旦督赤 qudaldučï (Lessing: qudalduyčï)
520. 「把門的」 匣呢匣赤 qayalyačï

523. 「放羊人」 活匿赤 qoniči

537. 「黒」 匣刺 qara

語頭の γ -

15. 「地」 合掣兒 γaɣar

120. 「三歳」 兀囊木里 γunan

201. 「麵」 兀立兒 γulir

227. 「手」 阿兒 γar

251. 「靴」 兀秃速 γutul~γutusun (Lessing: γutul のみ)

284. 「釘兒」 合荅孫 γadasun

332. 「野鷄」 戸魯還 γuryuul (長田氏注: <*γuryaul とする)

337. 「{厂+人+鳥}」 阿老安 γalayu

401. 「蕤」 和和 γoyosun (Lessing: γoyusun)

412. 「三」 兀魯班 γurban

421. 「三十」 兀眞 γučin

453. 「七月」 兀懶 γuran (羚羊) (Lessing: γura)

493. 「外面」 下荅刺 γadana

二

いま上記資料によりモンゴル文語の q-と γ-に対応する音訳漢字をまとめ使用頻度を付すと次のようである。

文語 q-と音訳漢字		文語 γ-と音訳漢字	
qa	匣(7),合(6),下(3),喝(1),遏(1)	γa	<u>阿</u> (2),合(2),下(1)
qayi	害(1)		
qayu	號(1)		
qan	罕(1)		
qu	忽(8),胡(1),或(1)	γu	<u>兀</u> (6),戸(1)
qun	昏(1)		
qo	忽(2),活(2),霍(1),豁(1)	γo	和(1)
qoyi	懷(1)		
qong	黄(2)		

文語 γ-に対応する「阿」(旧影母字)と「兀」(旧疑母字)は、同時に aqa (哥哥) に対する「阿合」、ämä (婦女) に対する「阿滅」、ulaya (鋪馬) に対する「兀刺」、urida (前) に対する「兀力荅」というように文語ゼロ-にも対応する。一方、「阿」

「兀」以外の「匣、合、下、忽、戸、和……」など、文語の q-とγ-にわたって使用される漢字はすべて旧匣母字と旧曉母字であり、語頭の h-を想定しうる場合を除き文語ゼロ-に対応することはない。さて、上表によると、文語ゼロ-にも対応する「阿」と「兀」は、文語γ-の音訳漢字に利用されるけれども文語 q-に利用されることはない。出現頻度をみると文語γ-を表記する主要な漢字ともなっている。このような文字選択の一定の偏りは、文語の q-とγ-に対応する区別が『至元訳語』のモンゴル語にも有ったことを示しているとみて大過ない。

もっとも、このような指摘は目新しいものではなく、長田夏樹 1953 で既になされている。長田夏樹 1953 は『至元訳語』の漢字音訳モンゴル語の特徴を述べた論文であり、その特徴の一つとして「語頭のγ-の脱落」を挙げる。文語の語頭のγ-にゼロ声母の音訳漢字が対応する例があると指摘した。ゼロ声母の音訳漢字とは「阿」と「兀」のことであり長田氏はこの字音にゼロ声母を再構成する。長田氏にとって、中期モンゴル語に文語の q-とγ-の如き区別が有るとすることは、自明であったとおもわれる。その上での指摘であるから、ことさらこの例をもって両者の区別に言及する必要はなかったまでのことであろう。しかしながら、最近では清格爾泰 1983 のように中期モンゴル語に文語の q-とγ-に相当する区別は無かったとする向きもある。いうまでもなく『至元訳語』は中期モンゴル語の資料の一つである。この資料に両者の区別を示す漢字選択の偏りがあるという長田夏樹 1953 の指摘（直接 q-とγ-の区別に言及しているわけではない）は、中期モンゴル語の q-とγ-の問題が単純ではないことを示している。

三

最後に『至元訳語』の「阿」と「兀」の声母がどのようなであったか問題となろう。両者は、γar（手）—阿兒、aqa（哥哥）—阿合、γulir（麵）—兀立兒、urida（前）—兀力荅、というように文語のγ-とゼロ-の表記に利用される。長田夏樹 1953 は「阿」と「兀」にゼロ声母を再構成するけれども、モンゴル語の現代諸方言よりみて（注 6）、文語γ-に対応する元代のモンゴル語音がゼロであったとは考えにくいこと言うまでもないであろう。これより、「阿」と「兀」の声母をどのようにみるかという問題が生ずる。文語γ-に対応する元代のモンゴル語音が漢語音で表記しづらい音であり、やむなくゼロ声母（異音として声門閉鎖音[ʔ-]など他の音声を伴っていたかもしれない）に近く発音された「阿」や「兀」を利用したということであるのか、あるいはゼロ声母として発音される字音の層と、[ŋ-]もしくは[v-]などの音として発音される字音の層があり、後者がモンゴル文語γ-に相当する音の表記に利用されたということであるかもしれない（注 7）。いずれにしても、現在のところ根拠を示して論ずることができない。今後の課題の一つである。

注

- 1) 服部四郎 1939, 「蒙文元朝秘史（一）の序」『服部四郎論文集第一巻 アルタイ諸言語の研究 I』（三省堂、1986年、158-166頁）所収による。
 - 2) 清格爾泰 1983, 「蒙古語塞音 q、k 的歷史演變」『民族語文』1985年第3期、1-10頁。「《蒙古秘史》和八思巴字文献都是比較嚴格記錄了實際發音的寶貴材料。這些文献把書面語的 q 和 γ 一律標記為一個音，說明當時這兩者曾經是一個音，至少在當時所記錄的方言里是一個音。」（1頁）
 - 3) このことについて吉池孝一 2005, 「哥葛などの元代音について」（『KOTONOHA』第36号。16-23頁）で言及したことがある。「また、『元朝秘史』『甲種本華夷訳語』やパスパ文字モンゴル語資料で区別のない/ga/と/qa/は中期モンゴル語で一つの音韻/qa/とされる向きもあるけれども、『至元訳語』ではモンゴル文語のγa と qa の両者に「合」が対応し、qa に「匣」が対応することから見て、両者に何らかの区別があったとせざるを得ない。この点も例を挙げて述べなければならぬところであるが稿を改めてということにしたい。」（17頁）。
 - 4) 長田夏樹 1953, 「元代の中・蒙対訳語彙「至元訳語」」『神戸外大論叢』第4巻第2・3号, pp. 91-118. 『長田夏樹論述集（上） 近代漢語の成立と胡漢複合文化』（ナカニシヤ出版。2000年）所収。
 - 5) F.D.Lessing et al.1995, *Mongolian-English Dictionary*, corrected re- printing. Bloomington,1995. Originally published in 1960.
 - 6) 孫竹主編 1990, 『蒙古語族語言詞典』（中国青海省：青海人民出版社）を参照。
 - 7) 現代の「標準的」な北京語において音節が[a]や[ɣ]など広めの母音で始まる場合、北方方言を広くみると、[ŋ-][v-][n-][ゼロ-]のいずれかで発音される。いま『普通話基礎方言基本詞彙集3』（陳章太・李行健主編、中国北京市：語文出版社出版、1996年出版）により「愛人」の「愛」の音を例として、それが北方の93地点でどのように発音されるかをみると、[ŋ-]とするもの46地点、[v-]とするもの4地点、[n-]とするもの8地点、[ゼロ-]とするもの33地点、その他2地点となる。93地点は北方方言区域からほぼ偏りなく選ばれているから、この数字はそのままそれぞれの音の勢力範囲を示している。これと類似した状況を元代にも認めることができるとすると、『至元訳語』の漢語には二種の字音の層があり、「阿」（旧影母字*ɣ-）などは一方でゼロ声母として、他方では[ŋ-][v-]などの音として発音され、後者がモンゴル文語γ-に相当する音の表記に利用されたということかもしれない。
- 一方、「兀」など[u]母音を持つ旧疑母字（*ŋ-）の状況はなかなか難しい。「兀」（旧疑母字）などは、現代の北方方言において、ゼロ声母の[u]もしくは唇歯の弱摩擦音[vu]となり、[ŋ-]や[v-]を伴って発音されることはないようだ。ところが、現代の南方方

言では古音が保たれておりしばしば[ŋ-]を伴って発音される（『漢語方音字彙第二版』文字改革出版社 1989 年出版を参照）。それで『至元訳語』の漢語ではどのようなであったかということが問題となる。元代の『蒙古字韻』によると「兀」など旧疑母字にはパスパ文字「u」が付されている。これより当時の標準的な字音ではゼロ声母の/u/に近い音であったとみることができる。もっとも、旧疑母字が、元代の南方方言において[ŋ-]で発音されたであろうことは、現代方言から推して知ることができる。問題は[ŋ-]の音が北方のどの範囲まで用いられていたかということであろう。今それを直接知ることはいけないけれども、『至元訳語』の漢語には二種の字音の層があり、「兀」などの疑母字は一方でゼロ声母として、他方では[ŋ-]として発音され、後者がモンゴル文語γ-に相当する音の表記に利用されたという状況はあったかもしれない。